



2020年度 付中通信第3号

山登如者学

2020.4.27

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

前号までのお話

これまでの話をまとめると、建学の精神「徳性の陶冶」の価値は、生徒が生きて暮らす時代や社会の要請を汲み取り、それを生徒にわかりやすく伝え、生徒自身が目標を掲げて歩みだせるようにすることによって高められる、そして高めることこそが私たち教師の使命だと、なります。

それで、いよいよ本号では、この時代と社会が要請する教育とは何か、2つの柱を立てて、詳しく語りたいと思います。

山登如者学

が、その前に、唐突ですが、この付中通信のタイトル「山登如」について解説をします。

「山登如者学」は出典が漢文ですから、横書きの文章に関わらず、縦書きと見立てて、左からではなく右から読みます。訓点を工夫すると、「学者山に登るがごとし」と書き下せます。「学者」は「学ぶ者」ではなく、「者」を主格を強調する助字と考えて「学ぶことは」と解します。



本校の会議室に掲げられている書ですが、杉敏介（戦前の第一高等学校校長で、夏目漱石の「吾輩は猫である」の津木ピン助のモデル。岩国転出前に縁あって一時本学園に奉職された）ゆかりの書と聞く。

それで、「学ぶことはまるで山に登るようなものだ」と直訳できます。

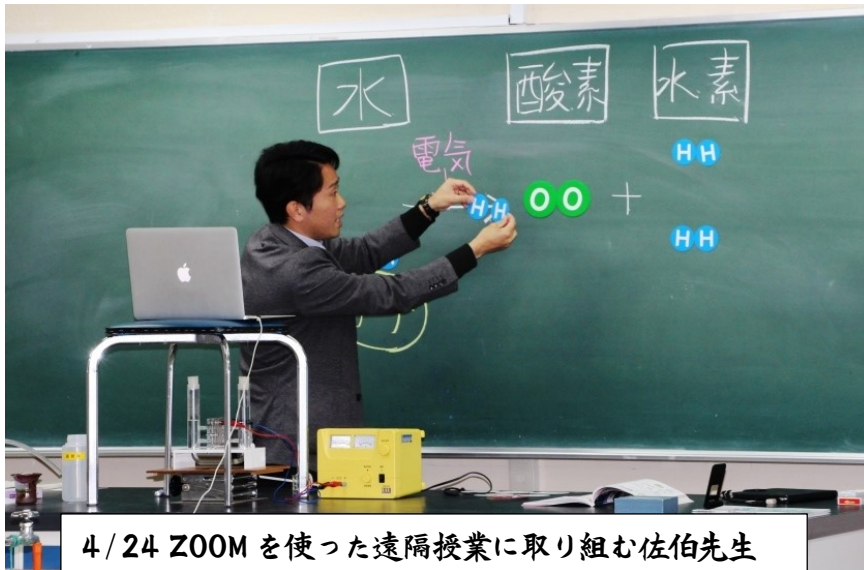
これで、たとえば、「登る最中は苦しいことも多いが、山頂にたどり着けば視界がおおいに開け、見晴らしがよくなる」と解釈すれば、だから今は苦しくともがまんせよという、学生への励ましの言葉に採れます。そして、見晴らしがよいというのは、物事を大局的に客観的に観ることができるようになる、ということを示唆したいのかもしれない。

また、たとえば、「学問は山に登るように、高みにのぼるほど見識が広がるということ」を示

唆して、人を学びへ誘おうとするものかもしれません。

しかし、この解釈は誤りだという見解がすぐに出てきます。というのは、学ぶ者がその道を極めることはあり得ないから、つまり学べば学ぶほど頂(いただき)は遠ざかっていくもの、学びに終わりはない、という考え方もあります。

すると、この言葉は、たとえば、「あたかも山に登るように、だんだんと視野(見識)が広くなっていく」と、今登っている山の頂上をイメージする解釈でない方が正しい気がしてきます。ただこの解釈は、登山の明るいイメージをかもしだすものですが、



4/24 ZOOM を使った遠隔授業に取り組む佐伯先生

たとえば、「こつこつと山に登っているようだが、まだまだ道半ば、学びの道は山に登ると同様決して容易ではない」と学ぶこと自体、そう簡単にはいかないと、たしなめてくれているのかもしれない。これは、安易な学びについて警鐘を鳴らそうという解釈となります。

十人十色

教育の話からだいぶ逸(そ)れた感がありますが、わざわざ「山登如者学」を持ち出したのには、やはり理由があります。

結局、言葉は同じでもそれを受け取る生徒の個性によって解釈は異なるわけですから、私がこれから述べる取り組みも、生徒個々人のあり様をよく観察し見定めたくて働きかけることができなければ、効果は期待できないということです。

現場の教師が自信をもって子どもたちに語れる言葉を持てるようになるかどうかは、生徒一人ひとりにどれだけ寄り添えるか、その生徒を深いところで理解できるか、その点にすべてかかっているとってよいかと思えます。